

# 宰府画報

第20号  
2023年9月  
(令和5年)  
発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 馮秀琨筆「山水図」

「大きな自然を細やかに描いた優品」

#### 吉嗣家に伝わる山水図

吉嗣家資料には未表装の作品も多いですが、今回紹介する馮秀琨筆「山水図」(図1)は表装され、表装の裏に「秀子璞太守金牋山水画 丁酉九月重装」と墨書した赤色の紙が貼ってあります(図2)。表装をやりなおし、大切に伝えられてきたことがわかります。「丁酉」は、後述する秀琨の活動期からすると1857年又は1917年にあたると考えられます。



図2 表装裏墨



図1 紙本墨画淡彩 掛幅装  
130.3 × 67.5 吉嗣家資料

この作品は、縦が130.3センチ、横が67.5センチの大幅面に、大きな自然を細やかに描いた山水画です。奥行きのある空間に、橋や集落や寺院などが散りばめられていて、見ていると思わず絵の中に引き込まれそうになります。紙本墨画淡彩で、繊細な筆致と淡い色づかいが、大観的な山水に柔らかな印象を与えています。

画面左上に「子璞秀琨寫」という墨書と、「秀琨/私印」(白文方印)「子璞/父」(朱文方印)の印章が押されていて、馮秀琨(子璞)という清の画家が描いたことがわかります。馮秀琨に関する記録は、『画史彙伝』(1882年)や『寒松閑談藝瑣録』(清張鳴珂撰)に見えます。彼は、咸豊(1850

(1861)の初めに粵東(浙江省)の郡副を務め、山水、花卉をたくみに描き、その祖先も浙江省の出身でした。 壮大さと繊細さの両立

馮秀琨が郡の副官という公職にあった文人画家であったこと、山水画をよくしたことなどが記録からわかりますが、本



図3 部分図

作品はその評価を裏付ける優れた出来栄で、全体の壮大な構成もさることながら、細部描写にも感心させられます(図3)。

家屋の中には机について向き合う二人の人物、岸辺に繋がれた船には船頭がいます。また、山のあちこちには赤く色づいた樹木が見出せます。人々の生活を取り巻く初秋の澄み切った空気が感じられる繊細な表現です。

#### 拝山と明清書画

吉嗣家資料には、吉嗣家三代だけでなく、日本・中国・朝鮮にわたる学者、政治家、医者、商人、教育者、軍人など幅広い作者の書画作品が含まれています。とくに二代拝山は、明清の書画に接する機会を求め、長崎をたびたび訪ね、明治11年(1893)には清に渡航し当地の文人たちと直接交流しています。拝山が明清の書画から何を学んだのかは今後の研究の課題ですが、本作品のような清の文人画家の優れた山水画が吉嗣家に伝来していることは重要な意味を持ちそうです。(小林知美)

## メイショ メイブツ 岩踏川

太宰府市内を流れる御笠川は場所により呼称が異なり、連歌屋周辺では岩踏川と呼ばれます。現在は岩床の一部が岩踏橋のたもとにあります。かつては大きな一枚岩があり、ここを「洗濯銀座」と言つて沢山の人が洗濯物をもつて洗いに来ていたそうです。

吉嗣拝山は15・16歳の頃、太宰府の漢学者である本田竹堂が主宰する岩潭書塾に通つています。「岩潭」とは岩踏川の淵の辺りという意味で、塾が岩踏川付近にあったこと由来すると考えられます。本田竹堂は慶応2年(1866)に五卿が太宰府滞在中に開いた書画会に吉嗣梅仙・萱島鶴栖とともに招かれており、太宰府では名の知れた人物でした。

梅仙・拝山の合作で、名所・名跡を描いた『太宰府廿四詠』(明治17年刊)にも岩踏川は描かれており、太宰府の名勝の一つでした。拝山が書いた詩には「岩潭久欠読書声(岩潭久しく欠く読書の声)」とかつて通つた書塾が廃れてしまったことが記されています。

(木村純也)



上：現在の岩踏川  
左：『太宰府廿四詠』  
(画像提供：  
太宰府市公文書館)



# 逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

## 【十二ヶ月風俗図絵巻】

齋藤秋圃作



《十二ヶ月風俗図絵巻》部分（8月・放生会、9月・菊見）  
紙本著色 卷子装 28.0×1143.0cm（全体） 天保12年（1841）頃 九州歴史資料館蔵

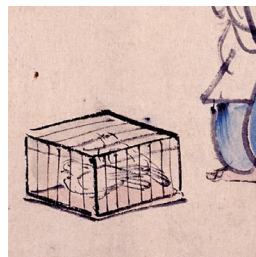
### 秋圃70歳の作

1年12ヶ月の風俗や風物を描く本作品は、数ある秋圃作品の中で代表作のひとつに位置づけられる優品です。本紙16号の「調査見聞」でも、息子の梅圃の作品とともに採り上げましたが、今回は秋の季節にちなんで、旧暦8月の放生会と9月の菊見の場面に限定して作品を紹介したいと思います。

### 放生会と菊見

放生会は日々の殺生を戒め、また生き物の命をいたたく事への感謝や供養のために、鳥や魚などを自然の中に放す行事です。九州では宮崎宮の放生会が有名ですが、京都の石清水八幡宮や鎌倉の鶴岡八幡宮など各地の寺社で行われます。

菊見もまた全国各地で見られる秋の風物詩です。菊を愛でる風俗は古くからありましたが、江戸時代に品種改良が進んだことにより様々な種類の菊が誕生し、



上：籠の中の“双鳩”  
左：懇意の仲だった秋圃と仙厓和尚を彷彿とずる菊見の場面



今日のように一般市民が親しむ行事として確立しました。

### 秋圃の遊び心？

空に放たれた鳥を見上げて喜ぶこともや、色とりどりの菊の花に見入る人物など、季節の風俗が表情豊かな人物描写とともに描かれる本作ですが、画中には少し意味深な表現が見られます。鳥を放つ人物の足下に置かれた籠の中の2羽の鳩。これは秋圃の別号「双鳩」を暗示しているようですが、鳩は放たれないまま籠の中。果たしてその意図はいかに？

本作は発注者や制作意図、伝来についてなど、不明な部分が多くあり、研究の余地を残す逸品です。（井形栄子）

いちまい 賞 鑑 稿 画

## 齋藤家資料 【歳寒三友図】

背の高い花瓶に梅の枝と竹が生けられ、その手前には松葉と奇石が描かれています。歳寒三友とは、冬の寒さをものともせず色を変えない松と竹、そして寒い季節に花を咲かせる梅の三者を指す言葉です。現代では「松竹梅」の言い方が一般的ですがどちらも同じ。縁起物としてひろく親しまれるワンチームです。向かつて右上の余白に「歳寒三友図」のタイ



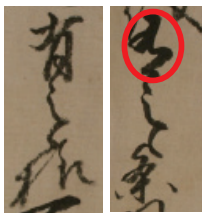
紙本墨画 吉圃梅仙作 縦150.8×横44.0cm 明治19年（1886）

トルと「七十翁梅儼」の落款、印章があります。落款の書風、印章、そして絵の作風から、本図は吉圃梅仙が明治19年（1886）に描いたものと確認できます。さて、本作は吉圃家ではなく齋藤家資料に含まれるもので、秋圃はもちろんのこと、子の梅圃も明治8年（1875）に世を去って10年以上を経て描かれたものです。齋藤家に入りたいきさつは不明ですが、当年は梅仙の盛大な古稀祝賀会が催されており、たとえば記念の品などとして齋藤家や近隣の知人宅などに配られたものかとも想像されます。齋藤家と吉圃家とのつながりを示唆する1枚です。（井形栄子）

### ひとこと ぐずし字

### 【有】

今回は古文書によく登場する文字「有」のくずし字を見たいと思います。中央右画像の赤枠の部分がそれで、「ナ」部分は「又」を書くように続き、「月」部分は「つ」の下に横線を足したような点が付く特徴的な崩し方となります。左画像は「月」の中が少し省略されていますが、原形のままです。



いずれも「有」の下の字は「之」という字で、右は「有之候条（これありそうろうじょう）」、左は「有之候様（これありそうろうじょう）」と書かれています。「有之」は「無之（これなし）」

とともに江戸時代の文書独特の表現です。

この文書は秋圃が秋月藩に登用された文化2年（1805）に、秋月藩家老宮崎織部らが作成した書状で、葵衛（齋藤秋圃）に藩主黒田長舒のもとへ出仕するよう伝える内容となります。この翌日、長舒と面会を果たした秋圃は御無足組に昇進し、絵画制作のための道具料として毎年銀五枚を支給され、お抱え絵師として活躍することとなります。（木村純也）



達書 齋藤家資料